

特別講演

「命と向き合う ～水族館獣医師の視点より～」

講師 植田 啓一 (うへだ けいいち)
 (一財) 沖縄美ら島財団総合研究センター
 動物研究室 室長 (獣医師)
 司会 古田 恒輔 (作業療法学科)



【プロフィール】

専門分野：小型歯鯨類の臨床獣医学

研究内容：水棲動物の外科的手技の研究

小型歯鯨類の新興真菌感染症の研究

経歴：1996年 酪農学園大学酪農学部獣医学科卒業

1996年 (社) 沖縄海洋生物飼育技術センター 勤務

2002年 (財) 海洋博覧会記念公園管理財団 (沖縄美ら海水族館) 勤務 現職

2008年 総合研究センター兼務 現職

2013年 博士・獣医学を取得

現在沖縄美ら海水族館は、世界最大規模の大水槽を有し「沖縄の海を再現する」ことをコンセプトに約 700 種 20000 点余りの生物を展示し、様々な展開を行っています。近年では、イルカをはじめとする鯨類、海牛類のマナティー、ウミガメ類の他に板鰓類であるジンベエザメやナンヨウマンタなどの大型水棲動物の健康管理に取り組んでいます。一般的に、水族館で動物を飼育する目的の1つは「動物の生態展示」です。同時に展示動物の健康管理を維持し、出来る限りより良い環境で飼育する事も水族館の使命でもあります。また従来の獣医界では疾病治療、術後管理、診断方法、外科治療に重点が置かれてきましたが、近年多くの獣医師が患畜の術後処置後の身体機能の改善と同時に QOL (Quality of Life) の維持向上が必要だと感じ、患畜の健康管理に関する再考がなされてきました。その結果、現在では大学附属動物病院や個人の動物病院において、理学療法 (Physical Therapy) の概念が一般的なものになりつつあります。しかし水族館においては、呼吸器細菌感染症を対象とした抗菌剤の投与や擦過傷等の皮膚除去などの比較的簡単な外科的処置の実践でした。そのため、疾病治療を行った動物に対しての治癒後の理学療法及び QOL の向上を念頭に置いたアプローチを実施、検討する機会がありませんでした。

また術後管理が困難とされるため、水族館では敬遠されがちな、外科的アプローチにおいては、ウミガメやイルカにおいて様々な手術を実施し、日本ではじめて全身麻酔下での手術を成功するまでに至りました。特に外科的アプローチの中でも、バンドウイルカの尾びれに発症した壊疽症例に対する尾びれの約 75% 切除するという外科的処置の例は、多方面からの協力を得て世界初の「人工尾びれ」の開発にまで発展し、国内外に大きな反響をもたらしました。

これらは、障害を負った展示動物であるイルカに対しての QOL を改善するための手段として「理学療

法」あるいは「リハビリテーション」という新たな概念を水族館に導入することになりました。2014年に残念ながらフジは亡くなりましたが、本症例に触発され、現在も米国フロリダ州のクリアウォーター水族館で保護された尾びれを完全に失ったバンドウイルカに人工尾びれを装着し、機能回復訓練を施す試みがなされています。

以上のように、私達が行ってきた画像診断機器による確定診断、外科手術の実施、人工尾びれの作成とそれを用いた理学療法の実施など、これら全ては水族館の於ける初の試みでした。そしてそれら一つ一つが、飼育・展示及び研究を目的とする水族館に“新たな概念”を導入することとなりました。

今後も飼育展示動物の健康管理にタブーを設けず、積極的に動物たちの命と向き合い、色々な取り組みを続けていきたいと考えています。